

巻 頭 言

■ファジーばやりである。

1990年の流行語のトップになったとか。家庭電気製品には、軒並みファジーがついている。ファジーであればとびつく。日本人の悪い癖である。さすが、家電メーカーも自制するようであるが。ファジーは、もともと、工学関係の専門用語であるが、コンピューターの進歩とともに市民権を得て、世間を賑わせることになったものである。最近では、理工系のみでなく、人文・社会系の分野でも、一般的に注目されはじめている。「こころの科学」の最新号の巻頭言でも、風祭元氏がとりあげている。私は、ファジーは、人間の科学にとって核ともなりうる考え方ではないかと思う。科学は、あいまいなことを明確にしていくことを、その主要命題としてきた。その結果が、現代の文明を産み出してきたのであり、私達の生活を豊かにしてきたのである。反面、はかり知れない害毒をまき散らす皮肉な結果をもたらしてもいるのだが。しかし、人間を見るかぎり、まだまだ分からないことばかりである。永久に分からない存在であるといってもよいのかもしれない。人間は、ファジーな存在である。ファジーを前提として、社会現象や人間の行動をみると、さまざまなことが見えてくるのではないだろうか。少なくとも、現象をあるがままに受け入れることからスタートすることが出来るし、白黒で決着をつけることを急がなくなるのではないだろうか。

■生涯学習ばやりである。

生涯学習は今始まったものではない。もともと、人は生涯学び続けてきたし、これからも学び続けるだろう。とすれば、生涯学習が制度として、国が支配しはじめることに、ある種の危険を感じる。今、まだその気配はないが、定着させるために、あるいは、定着するに従って、そうならないとは限らない。本来、学びは、その人独自のものであり、他から強制されるものではない。特に、義務教育の外での学習であるだけに、そのことは注意されねばならないだろう。強制に弱い日本人の特性を思えばなおさらのことである。身近なところに、多様な場が用意されることで、わたしたち一人一人が、自由に選択し、それぞれのやり方で学ぶことが望まれる。

■ファジーは、生涯学習のベースである。

学習に目標は必要であるが、生涯学習において、それは、いつもクリスプ（ファジーの反対概念できちんとしていること）である必要はない。むしろ、それは柔軟に変化してよいし、学びながら、どんどん変わっていったよいものであると思う。ゴールを目指して頑張るが、必ず到達しなければならぬものでもない。到達に時間がかかってもよい。その過程（プロセス）こそ大切である。学習の場は、学ぶ人が、思い思いに、その場にいることができ、学ぶ内容も多様であるのがよい。ファジーな場がそこにある。ファジーである人が相互にかかわりあって、ゆっくり、ゆったりと、楽しみながら学んでいくことはすばらしいことではないだろうか。

星 野 欣 生